

## 小湊漁港の「みなと文化」

浅岡 力

---

## 目 次

第1章 小湊漁港の整備と利用の沿革 .....	26-1
1. 古代・中世の小湊 .....	26-1
2. 近世の小湊 .....	26-2
3. 明治期の小湊 .....	26-6
4. 大正期の小湊 .....	26-8
5. 昭和・平成期の小湊 .....	26-9
第2章 「みなと文化」の要素別概要 .....	26-12
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」 ...	26-12
(1) 天津・小湊の漁業発展に貢献した人物 .....	26-12
(2) 海を介しての交流によって生まれた言葉 .....	26-13
(3) 信仰 .....	26-14
(4) 禁忌について .....	26-15
(5) 小湊を訪れた文人 .....	26-15
(6) 謡曲にうたわれた蓮華淵 .....	26-17
2. 現代における「みなと文化」 .....	26-17
(1) 資料に見る門前町・港町の町並み .....	26-17
(2) 姿を消した和船 .....	26-19
(3) 船大工・造船業の現状 .....	26-19
(4) 伝統的ハバノリ漁 .....	26-19
(5) 資料に見る浦役人 .....	26-19
(6) 戦争の傷跡（特攻兵器震洋の基地跡） .....	26-20
(7) 小湊漁港の航路標識 .....	26-20
第3章 「みなと文化」の保存と振興及び今後の課題 .....	26-21
1. 「みなと文化」振興への今後の課題と伝統的な漁具・道具の収蔵・展示施設 .....	26-21
(1) 伝統的な漁具・道具の収蔵・展示施設 .....	26-21
(2) 港を通じた地域の振興活動 .....	26-21
〔参考資料〕 .....	26-23

所在地：千葉県鴨川市小湊

港の種類：漁港

港格：第3種漁港



【位置図】



【現況写真】(千葉県漁港課 HP)

## 第1章 小湊漁港の整備と利用の沿革

### 1. 古代・中世の小湊

#### (1) 古代の房総

「房総開拓の神話」は、天<sup>あめ</sup>富<sup>とみ</sup>命<sup>のみこと</sup>が阿波（現徳島県）の齋部の人々を率いて房総の地に来て、麻を栽培して成功した。そこで齋部の人々が居住したところを安房と名づけたと伝えられている。また、天皇の食膳に奉仕した膳<sup>かしわで</sup>氏の祖とされる六<sup>むつかりの</sup>鴈<sup>かり</sup>命<sup>のみこと</sup>が、伝説上の大王景行天皇の房総行幸の際、淡水門で獲れた魚を献上したと伝えられている。

古代の小湊を含む房州の海に面する地域は、その多くが漁業を<sup>なりわい</sup>生業とする漁村であったと思われる。奈良時代に安房国の漁民が鰯<sup>あわび</sup>を都に貢進したときに、鰯の荷に付けた木簡（木の荷札）が平城京跡から出土している。安房国から都まで34日もかけて徒歩で運ばれて貢納された鰯は鳥子鰯・耳放鰯・耳着鰯などと呼ばれ、いずれも干鰯<sup>ほしあわび</sup>であった。名称は加工の仕方によって異なっていたのであろう。干鰯は古くから保存食品として珍重されていたという。鰯漁は現在でも小湊浦で行われている。古代の小湊は安房国長狭郡の置津郷か伴部郷に属していたと考えられている。

#### (2) 中世・日蓮と小湊

小湊という地名が史料に現れるのは、鎌倉時代以降のことである。それも日蓮とのかかわりのなかに見いだされる。日蓮が文永12年（1275）2月16日に、日ごろ郷里の生家がいろいろと恩恵を受けていた領家（荘園の領主）名越氏の新尼御前<sup>しんあまごぜん</sup>にあてて、甲斐国（現山梨県）身延山から差し出した礼状に

「あまのり（甘海苔）ひとふくろ送りいただき、有り難く思います。今このあまのりを見てなつかしく故郷が思い出されます。かたうみ（片海）・いちかわ（市川）・こみなと（小湊）の磯のほとりで、昔見たあまのりです（「日蓮聖人遺文」）。」

と、故郷の香りのする海苔を手にして、小湊の地を懐かしく回想している。

また、日蓮の死後に鎌倉妙法寺の日澄<sup>にっしょう</sup>が16世紀の初めに、日蓮聖人の生涯を絵と文章

で描いた「日蓮聖人註画讃」には、日蓮の父は遠江国（現静岡県）の武士貫名重実の次男重忠しげただといい、何かの理由で「安房国長狭郡東条郷片海市河（川）村小湊」に配流となり、漁夫になったと記している。さらに日蓮の教えをまとめた「本尊問答抄」は、日蓮が誕生の地について「安房国長狭郡東条郷片海の海人（漁師）の子である」と具体的に述べたことが載っている。なお、中世になり古代の郷は変質して、長狭郡の東部一帯には東条郷が成立していた。

### （3）誕生寺の建立と小湊

小湊の日蓮宗誕生寺は、日蓮聖人誕生の地を記念して、弟子の寂日坊日家にけが、兄の興津領主佐久間重忠の援助によって建治2年（1276）に開いた寺である。初め高光山日蓮誕生寺と称した。しかし、日蓮誕生寺はその後、明応7年（1498）8月と元禄16年（1703）11月の二度の大地震・大津波に見舞われ、堂塔を失い寺地も水没する被害を受け、已む無く現在の地に寺地を移して再建したのである。元禄後に寺の名称も小湊山誕生寺に改められた。なお、日蓮誕生の地と伝えられる片海という地名は、江戸時代の初めまでは史料で確認できるが、元禄以降は見られなくなり現在に伝えられていない。小湊浦の大弁天島・小弁天島の辺りが片海の地であろうとされている。



【江戸時代の小湊浦（広重画「山海見立相撲—安房小湊」）（成田山霊光館蔵）】

## 2. 近世の小湊

### （1）誕生寺領小湊の成立

日蓮宗は、地方武士・都市商人・職人などに支持されて発展した。戦国時代に安房を支配した里見氏も日蓮宗を保護している。里見氏の重臣正木頼忠よりただは主家の許しを得て、天正

8年（1580）8月に誕生寺に寺領を寄進している。その寄進状に「内浦村小湊両谷の田畑40石を永代寄進する。また、運送のために寺領として海上10石を差し添える」とあり、小湊浦も寺領に加えられている。慶長9年（1604）4月に正木頼忠の名をもって、房総里見氏9代の当主里見義康の「位牌料」として市川の田畑20石が寄進された。

誕生寺寺領は、海石（海高とも）を加えて70石となった。後に内浦村に含まれていた寺領が分村して、小湊村と市川村が成立した。誕生寺領の内訳は小湊村53石、市川村14石、内浦村3石であった。慶長19年（1614）に里見氏は改易となったが、誕生寺領70石は幕府から改めて所有が認められ、明治の初めまで寺領として誕生寺の支配が続いた。

## （2）門前町小湊

日蓮宗の名刹誕生寺の門前町小湊は、旅館やホテルが建ち並び、妙の浦（鯛の浦）見物の観光船が発着し、名物「鯛せんべい」や海産物などの土産品をそろえた店舗が軒を連ねて、門前町を形成している。このような小湊の町並みがいつごろから見られるようになったのかは、江戸期以前の史料を欠くので明らかでない。江戸期に入ると何点かの史料が残されている。元禄の大津波による被害を受ける2年前にまとめられた元禄14年（1701）の「小湊・市川の門前屋敷水帳（検地帳）」と「小湊田畑名寄帳」である。なお、当時の誕生寺領小湊は現在の鴨川市小湊の全域と内浦の一部の範囲であった。

門前町小湊の町割りは、波来町（萩町）・新町・小船谷町・湊町・入町・橋本町・浜町・市川などの町名が書き上げられ、132軒の家を数え、商家や鍛冶・大工などの職人が書き留められている。栖原屋伝九郎・いずみ屋仁兵衛という関西から移住したと思われる名も見いだされる。

江戸後期の天保9年（1838）の「小湊村書上」には、家数150軒、人口824人（男408人・女416人）とあり、生業については鍛冶3軒・家大工5軒・船大工3軒・桶屋2軒・商家58軒・漁師79軒と記録され、漁業の町であったことを示している。

## （3）東廻り航路の整備と避難港小湊

近世に入り誕生寺の門前町小湊は、東廻り航路の避難港として登場するのである。なお、東廻り航路とは、日本海の出羽国酒田（現山形県酒田市）から津軽海峡・三陸沖・鹿島灘・房総半島を経て江戸に至る航路のことである。

近世初期に幕府や東北諸藩（山形藩・仙台藩など）は、それぞれ、太平洋を南下して江戸まで米や諸物資を輸送するルートの開拓に努力していた。寛文11年（1670）に幕府は河村瑞賢（江戸初期の事業家）に航路の整備を命じた。瑞賢は房総半島沖の難所（犬吠崎沖と野島崎沖）を避け、南下した廻船は伊豆の下田や三浦半島の三崎に直航させ、そこで適当な西南風を得て江戸湾に入るようにさせた。また、航路の沿岸の諸藩には廻船の保護を義務づけ、那珂湊・銚子浦・小湊浦（内浦湾）に番所を設け、浦役人を配置して廻船の援助と監視にあたらせた。これより東北地方から江戸への廻船航路が確立したという。

幕府の城米船や諸藩の廻米船が難風を避けて入港する小湊浦には番所・浦役人が置かれ、諸藩の廻船番小屋や船宿も設けられた。また、廻船の入津や難船処理の人足稼ぎには、小湊村と内浦村の村民を公平に取り扱うことが決められていた。

小湊浦について、天保7年（1836）の「小湊村書上」は、

「南東に開けた湾（内浦湾）を利用した入江に設けられている。湊口の幅は70間（約126m）、深さ4尋（約7m）、海岸から湊の入口まで180間（約325m）余り、大船の停泊に適している。また、南西風で入港し北風で出港するのがよく、東北風で入港するのは危険である。もっとも風向きにかかわらず、係留には適している。」

と解説している。

内浦湾に位置する小湊浦は、東廻り航路で最も危険とされた野島崎沖という水域に臨む良港として、難風を避けて多くの廻船が入港し、再び良い天候になるまで停泊した。このことから小湊村は、漁業や門前町であることとは別に避難港としても、東廻り航路を往来する廻船を相手に行うさまざまな業務に従事していたのである。

誕生寺は、元禄14年（1701）8月に門前に家を構える人々に「門前掟」を定めて、日々の生活についての規定を示した。全文44か条の内4条から11条までの8か条は、廻船に関する規則を載せている。即ち

- ①城米（非常用として備蓄される米穀）を積んだ廻船が停泊しても一粒の米も買い求めてはならない。用木の廻船の場合も同様である。
- ②公儀廻船は申すに及ばず諸国の廻船についても、難風に遭い荷打（安全を保つため積荷を海に捨てること）して入津したときは、条目に従い相改めて浦証文（海難の証明書）を渡すこと。
- ③破船の節は、浮沈の荷物・船具などを早速に取り揚げ、浦役人に届け出ること。
- ④破船のとき、荷打した米穀・荷物・船具などを盗み取った者は追放、内容によっては公儀の沙汰に及ぶこともある。
- ⑤流れてきた船材や用木があるときは、早々に注進すること。
- ⑥当村は往還の村ではないが、海道浦手の早荷や廻文は昼夜にかかわらず届けること。
- ⑦夜陰に荷物を持ち来り、船を借りたいと申す者がいても、貸し出してはならない。若し隠れて貸し出した者は処罰する。
- ⑧難風の節、湊に係留の船には、綱などを貸し出し加勢の人足を出して、油断なく助けること。また、入津に危ない船や海辺に漂う船があれば、直ちに救助船を出すこと。

などである。しかし、小湊は東廻り航路の避難港として位置づけられていたが、海運に関する史料はあまり残されていない。断片的史料から当時の様子を見てみよう。

誕生寺所蔵の「誕生寺領山海由緒書」に、元禄12年（1699）3月に山形の米沢藩上杉氏の船手役人小泉弥左衛門が小湊に来て、名主久左衛門に藩の廻船役所建設の申し込みを行ったことが見える。また弘化2年（1845）の「廻船取扱出入内済につき議定」（内浦・長谷川家文書）によれば、小湊村には諸廻船の世話をする廻船方という浦役人が置かれていた。一般の商船に加えて仙台藩の穀船を世話していた廻船方森嘉茂次郎、同じく南部藩穀船を世話していた廻船方鈴木金三郎、名主を勤め廻船方を兼務していた渡辺啓三郎などの氏名が記録されている。

江戸時代、鴨川市域の村々の年貢米は、市内磯村の余瀬町船宿か、同じく横渚村の前原町船宿を通して廻船に積み込まれ、江戸に送られていた。小湊は近隣の村々の年貢米積み出し港としては、全く機能していない。これは良好な地形によって避難港として重視され、幕府や東北諸藩の穀船・商船が盛んに入津し、それによって浦全体が繁盛していたからで

ある。

#### （４）関西漁民の進出と小湊の漁業

中世までの房総の漁業は、自給的性格が強いものであったが、近世に入り関西方面から進んだ漁法を持った漁民の進出によって急速に発展した。特に網漁法は画期的であったという。その様子を慶長 19 年（1614）の奥書のある三浦浄心の随筆「慶長見聞集」が伝えているので紹介しよう。

「相模・安房・上総・下総・武蔵、この 5 か国の中に大きな入海（江戸湾のこと）がある。諸国の海を回遊する大魚どもが、この入海をよいすみかと知って集まっていた。しかし、関東の海人はその魚を獲る方法を知らず、磯辺の小魚を小さな網や釣糸を垂れて獲るくらいであった。しかるに、江戸に幕府が開かれて繁昌したので、西国の海人が関東に来てこの魚を見て大いに喜び、地獄網という大網を作り、大魚小魚を一網打尽に捕らえた。」

小湊を含む外房の漁業は、関西漁民の伝えた新しい漁法を受け入れながら発展した。寛永 6 年（1629）には伊勢（現三重県）の海士船数隻が、小湊の磯で鰯漁を行ったと伝え（「天津小湊町史」）、また承応年間（1652-54）までに紀州（現和歌山県）栖原村の漁民が房州の浦々に出漁して、漁業の場所を見立て鰯漁を行ったという（「安房郡水産沿革史」）。関西漁民の関東への進出にあたり、紀州藩や和泉国（現大阪府）の岸和田藩などは免許状を与えて、その把握に努めたと伝えられている。

次に門前町小湊の漁業について見てみよう。「誕生寺領山海由緒書」の承応 3 年（1654）10 月の項に「地船 22 艘、旅船 49 艘」と記録されている。江戸前期の承応のころには、地元の漁船 22 艘と関西などからの旅船 49 艘が、小湊浦や内浦湾沖で操業していた。漁師は領主である誕生寺に運上金（営業許可税）として、海老網船一艘につき錢 200 文、鰯買船一艘につき錢 500 文、鰹釣船一艘につき金 2 朱（錢 500 文）を上納していた。鰯運上は高く金 1 両 2 分とされていた。但し、小湊村民は 3 分の 1 が減額されていた。なお、江戸時代の貨幣には金・銀・錢の三貨があり、金貨は両・分・朱をもって数え 4 朱が 1 分、4 分が 1 両の四進法を用いていた。銀貨には丁銀・豆板銀があり、60 匁（1 匁は 3.75g）をもって 1 両とした。錢は銅錢のことで 4,000 文（4 貫文）をもって 1 両とした。

また、宝永 5 年（1708）5 月に小湊廻船問屋四軒が、幕府の代官原善右衛門に提出した「申立書」に「房州小湊村誕生寺領江戸運送漁船拾三艘」と、江戸へ生魚や干鰯などを運んだ押送船 13 艘を所持していたことを挙げ、「小湊村誕生寺は、御朱印地であるので諸役御免」であると書き上げている。小湊村の押送船は江戸往復の際「御免船」として、浦賀番所の通行税が免除されていたのであった。

享保 4 年（1719）10 月に鍋屋善三郎が小湊村名主の五郎右衛門に差出した「小湊浦八手網請負証文」によれば、善三郎は享保 4 年から同 9 年までの 5 年間で金 55 両で請負っている。善三郎は鰯漁を請負い、干鰯の生産を行っていたのであろう。

#### （５）小湊浦（内浦湾）近海の高難

小湊村の西隣内浦村に浄土真宗本願寺派に属する善龍寺がある。同寺に「諸国廻船溺死人過去帳」という文書が所蔵されている。この文書は江戸時代の貞享年中（1684-87）か

ら明治6年(1873)までの約200年間に、小湊浦近海で遭難し亡くなった船乗りを善龍寺が供養した記録である。この文書によって主な海難の様子を見てみよう。なお、死者には航行中の病死や不慮の事故で落命した者も含まれている。

正徳5年(1715)3月21日、小湊村伝九郎方に滞在して釣り漁を行っていた相州鎌倉の旅漁師5人が、松ヶ鼻沖にて操業中難風に遭い破船、5人とも溺死した。同年の4月5日と10日に2人の遺体が収容された。

享保15年(1730)8月30日難風に見舞われ、青森の南部横浜の廻船と伊勢の廻船4艘が小湊沖で遭難し、24人の犠牲者を出している。

宝暦3年(1753)12月23日から24日にかけての大風波によって、仙台船など15艘が松ヶ鼻沖で遭難したが、10艘は辛うじて湾内に逃れ乗組員も無事に救助された。しかし、5艘は大きな被害を受け、記録によれば仙台船14人乗り祝田丸は7人、同じく仙台の16人乗り戎丸<sup>えびす</sup>は1人、同じく16人乗りの松田丸は2人、同じく16人乗りの神国丸は1人、住吉の平四郎船(船名不詳)は1人、合わせて12人の溺死者を出している。

また、天保5年(1834)10月、仙台門ノ脇の14人乗り勧告丸は米殻を積んで石巻<sup>いしのまき</sup>を28日に出帆して江戸に向かった。九十九里沖で難風に遭遇して吹き流され、5月間漂流し、翌年の3月20日に小湊浦に入津したという。この間乗組員1人が病死したと記録されている。

天保6年(1835)6月3日、松ヶ鼻沖で仙台の廻船2艘が大波に遭い、2艘とも転覆し4人の犠牲者を出したが、28人は救助されたという。

天保11年(1840)1月29日の明け方、大阪寺嶋の廻船問屋讃岐屋<sup>さぬき</sup>の妙栄丸8人乗りが、当浦の黒岩沖で遭難している。

誕生寺所蔵の「檣(帆柱)寄進につき口上」と表題のある文書は、安政2年の遭難の様子を次のように伝えている。奥州門ノ脇村(現宮城県石巻市)の船宿八右衛門所有の観音丸は、安政2年(1855)1月に仙台藩の廻米を積み込み、沖船頭又十郎ほか15人が乗り組み、江戸をめざして出帆した。平穏な航海を続け那珂湊・銚子を経て、2月初旬に小湊浦に入津し番所の検査<sup>ひより</sup>を受けた。日和を見て2月6日の早朝小湊を出て半島の突端を迂回し伊豆大島の沖合に達したとき、信じられないような難風に遭遇した。船は高波に翻ろうされて沈没の危機に陥った。已む無く積み荷の米を海中に投棄して難を避けたが、船は大きく破損した。洋上を漂流すること十数日、同月の22日に小湊浦にたどり着き、九死に一生を得た。乗組員一同は一人も欠けることなく小湊浦に戻ることが出来たのは、奇跡としか思えないと考え、高祖(日蓮上人)のご加護として、仙台藩廻船方を勤めていた森嘉茂<sup>もりかもち</sup>次郎と小湊村名主渡辺啓三郎の両人を世話人に立て、辛うじて残った船の帆柱の一部を報恩の印として、誕生寺に奉納したという。

### 3. 明治期の小湊

#### (1) 明治前期

松ヶ鼻から入道ヶ岬までの小湊湾(内浦湾)は、湾口が南に面し、水深は3mから20mほどで、誕生寺領に属する漁港であり、東廻り航路の避難港であった。明治維新後の明治4年(1871)、境内地を除く他の寺領は全て上知(じょうちとも)を命じられて政府に返納され、誕生寺の支配を離れ木更津県次いで明治6年6月千葉県の成立によって、千葉県

の管轄下に置かれた。しかし、小湊村は誕生寺の門前町としての色合いを強く残していた。

明治12年(1879)10月に小湊村・内浦村連合村が、安房・平・朝夷・長狭の四郡連合の郡役所に提出した「水産調」は、明治初期の漁業の様子を次のように記している。

「連合村の戸数は474戸、うち漁民は三分の二を占め、残りは農工商に従事している。漁業は鯉・鮪・秋刀魚・鰯・鮫・鯖・タコ・イカなどの漁が盛んである。鯉漁の始まりは天和年代(1681-83)とされ、次いで享保年代(1716-35)に鯖漁が起こった。その後、鰯をとる八手網が始まり干鰯の生産も行われた。天明年代(1781-88)ころから鯖・イカ・タコなどの漁が行われるようになった。

鯉漁は旧暦3月から9月ころ行い、餌は鰯を用いる。釣り上げた鯉は身を四つにして煮たり蒸すなどの工程を経てカツオ節を生産した。」

## (2) 明治後期

明治22年(1889)3月に小湊村と内浦村が合併して湊村が誕生した。戸数488戸(小湊189戸・内浦299戸)、人口2,927人(小湊1,152人・内浦1,775人)であった。なお、湊村は昭和3年(1928)11月に町制を施行し小湊町と改称した。

明治34年(1901)4月に漁業法の公布をうけ、明治36年6月に湊村漁業組合が設立された。組合員は570人であった。湊村では魚が暗所を好むことを利用して海岸に樹木を植える魚付林づくりを行っている。小湊区では宇越ヶ谷の草生地3町9反歩に、内浦区でも宇寄浦の区有地3町9反歩に魚付林を造成した。

明治45年(1912)6月、湊村は安房郡長あてに小湊漁港に関する「漁港踏査調書」を提出した。これによって明治後期の小湊の漁業を見てみよう。

漁況については、明治20年(1887)ころから次第に不振となったが、明治25年ころから回復して、それから6、7年間は盛況であった。その後また不振となったが、幸いサンマ刺網など新しい漁法が開発され、漁業者の生活は普通に維持されていた。しかし、漁業の一段の発展を図るには石油発動機船の建造が必要と考えられていた。

水揚げ金額は、明治42年から44年までの3か年平均で、鮪・鰯・鮫・秋刀魚・鯉の順であった。鯉は4割が鯉節に、秋刀魚は2割が乾物にされる外は生のまま売買された。鮫は乾物に鮫はひれが出荷されたが、鮪・鰯などはほとんど生のまま売買された。

輸送は、小湊港から和船や東京湾汽船の定期航路が利用された。しばしば波浪により欠航することがあり、そのときは荷馬車や荷車で大原町(現いすみ市)に運び、そこから鉄道が利用された。輸送された数量・金額は、明治42年~44年の3か年平均で1か年生魚は約22万7,000貫・16万円余り、水産加工製品が約1万1,000貫・1万5,000円余りであった。

小湊漁港に出入りする漁船は、明治末年1か年に地元船160隻、銚子・白浜・相模・伊



【内浦湾(小湊湾とも)】

豆などからの漁船 25 隻（うち西洋型船 2 隻）を数えた。漁船が最も多く出入りしたのは、鮪・鰹・秋刀魚・鮫の漁期である 10 月から 12 月であった。漁場は小湊浦（内浦浦）沖から北は九十九里沖、南は伊豆七島付近まで及んだ。

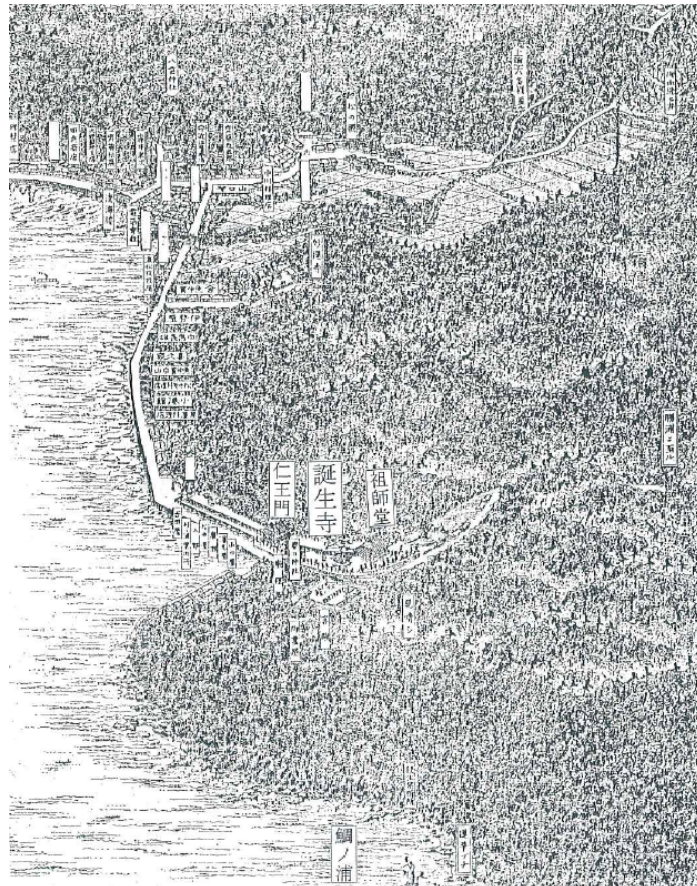
#### 4. 大正期の小湊

大正 6 年（1917）にまとめられた「村誌」は、湊村を次のように紹介している。

「本村は、林野が多く平坦な土地は少ない。したがって耕地は百町歩に満たない（田 50 町歩余、畑 46 町歩余）。しかし、土壌は概して肥沃である。農業は二分で、漁業は全体の半分を占め、商工業は三分である。戸数は 632 戸でその職業別は、漁業 283 戸、農業 108 戸、商業 93 戸（うち旅宿 7 軒）、工業 72 戸、交通業 17 戸、その他 59 戸などであった。」

大正期の湊村も漁業の町であるとともに、門前町・観光の町であったことを示している。

「安房郡誌」によれば大正 10 年ころ、湊村には 11 隻の石油発動機船があり、大きさは 6 トンから 12 トンであった。これらの船はいずれもカジキマグロの突き棒漁に従事していた。また、「千葉県漁港」（昭和 3 年・千葉県）によれば昭和初期のころ、小湊漁港を根拠地（母港）としていた漁船は、廻船を含めた発動機船 46 隻、その他の漁船 120 隻であり、他県からの発動機船の出入りも多かったようである。ちなみに、大正 8 年（1919）の湊村漁獲高は 16 万 6,000 円余りであった。（「安房郡誌」）。



【大正 4 年 11 月 安房倶楽部発行「誕生寺と門前町」】

## 5. 昭和・平成期の小湊

### (1) 戦前期の小湊

房総線（現JR外房線）は、昭和2年（1927）2月に外房の勝浦から上総興津<sup>かずさおきつ</sup>まで延び、昭和4年4月には安房鴨川までの全線が開通した。これまでの道路輸送や船による輸送に加えて、小湊からの鉄道輸送によって、水産物が東京などの消費地に、より早く運べるようになった。小湊町（湊村が昭和3年11月町制を施行して小湊町と改称）も漁港施設を整備して水揚げ量の拡大を図ることが考えられた。

小湊港は、湾となっているが南側の遮蔽が完全でないため、夏や秋の台風期の激浪によって漁船が破損することがあった。防波堤を築くなどの漁港の修築は長年の悲願であった。

小湊港の船だまり（船を碇泊させるところ）の修築工事は、昭和13年（1938）から翌14年にかけて行われた。この工事は長さ192mの南防波堤と長さ80mの北防波堤を、いずれも干潮面からの高さが3mになるように築造し、同時に港内を干潮時1m以上の水深を保つように浚渫した。また、水揚げの岸壁を216㎡に広げた。これによって常に40隻の発動機船が係留できた。さらに昭和15年6月から9月にかけて港内の浚渫を行い、干潮時でも水深2.5m以上を保つようにした。その結果、70～80トン級の漁船が自由に出入りできるようになった。

漁業組合も町の補助を受けながら諸事業を施設し、面目を一新した。すなわち、昭和15年には共同販売所、漁船への給水設備、共同倉庫、アワビ・伊勢エビの養殖場、共同加工場、製氷工場、重油タンク、漁船機関修理工場などの各種漁業施設が短期間のうちに整い、飛躍的に水産物の増産を実現した。水揚げ金額は、昭和12年に24万円余りであったが昭和15年には3倍の67万円余りに達した。水揚げ金額を漁獲物別に見ると、鯖が28万円あまりで4割を占め、次いで金目鯛が10万円余り、イカが5万円余りであった。小湊町産物の昭和15年の販売額は、前掲のように水産物が圧倒的に多く、それに次ぐのは木炭の4万7,000円余りであった。



【昭和初年ころの誕生寺門前と小湊漁港】

昭和16年（1941）4

月、生活必需物資統制令が出されて、生鮮魚介類の配給制度が発足し、千葉県下では小湊町のほか鴨川町・勝浦町・銚子市が水揚げ地に指定された。指定水揚げ地では鮮魚出荷統制組合が組織され、政府の指定する中央卸売市場への出荷が義務づけられたのであった。

## （２）戦後の漁業改革

敗戦により海外漁場を失い、国内漁場に頼るしかなくなった漁業においては、漁業制度を改革し、その漁獲高の増進を図ることが緊急の課題であった。昭和 24 年（1949）12 月に新しい漁業法が公布され、漁業の民主化、近代化が進められることとなった。

小湊漁港では、敗戦直後の昭和 21 年 11 月から 60 トン～70 トン級の大型漁船がいつでも自由に入出りでき、台風などの避難港としても利用できるように、漁港の堀削並びに突堤延長工事が行われた。昭和 23 年（1948）のアイオン台風で被害を受けた小湊漁港の復旧工事は、ようやく翌年の 12 月に完成した。同港には 200 トン級の船の入出りが可能になったという。小湊漁港では昭和 25 年以降も漁港の修築工事が国庫補助を受けて行われている。

## （３）戦後の町村合併

戦後の町村は、新制中学校の新設や社会福祉関係の業務の増加などで財政困難な状況に置かれていた。このため町村合併によって適正な規模の町村をつくる機運が高まり、昭和 28 年（1953）8 月に町村合併促進法が成立した。小湊町も天津町との合併の気運が高まり、昭和 30 年（1955）2 月 11 日に両町は合併し「天津小湊町」が誕生した。同年 10 月 1 日の国勢調査の人口は 1 万 2,590 人（天津 8,402 人、小湊 4,188 人）であった。

なお、平成 17 年 2 月 11 日に天津小湊町は、鴨川市と合併し「新鴨川市」が成立した。

## （４）小湊浦に開設された水産の実験実習場

水産講習所（後の東京水産大学、現海洋大学）の実験実習の施設として、千葉県たてやまの館山に高島実習場が設けられていたが、昭和 5 年（1930）に海軍の飛行場が館山に建設されることになった。実習場は移転することになり移転先として小湊湾に臨む内浦の地が選ばれた。名称は小湊実習場と名付けられた。

新しい実習場の開設は、昭和 7 年（1932）6 月 28 日のことで、本館の建設にあたり海軍は波打ち際にコンクリートの護岸壁を設けた。実習場の敷地総面積は約 5 万 m<sup>2</sup>、ほかに総面積にほぼ等しい禁猟区海面が設けられた。敷地内には鉄筋コンクリートで造った円型の本館をはじめとする諸施設が建てられた。海岸には大きな生簀いけすが設けられていた。

本館の 1 階は水族館にあてられていたが、円型の建物は、誕生寺とならんで町のシンボリック的存在となり、子供たちの遠足に利用されるようになった。本館は太平洋に面していたため台風や高潮の被害をたびたび受けた。昭和 18 年（1943）10 月 3 日の激浪は海軍の築いた護岸壁も役に立たず、標本室が破壊され多数の図書や標本を流失した。また、昭和 33 年（1958）9 月 18 日の台風 21 号



【珍しい円筒型の水族館】

では、護岸壁が倒壊するなど施設も大きな被害を受けた。

小湊実習場は、敷地の大半が岩や山林であり、施設の拡張や改善が望めないこと、台風や高潮の被害を受けやすいこと、さらに施設の老朽化により、館山市の坂田地区に移転が決まり、昭和 55 年（1980）9 月に移転が行われた。閉所後の小湊実習場は千葉大学に移管され、大学の付属となり千葉大学バイオシステム研究センターとして活用されている。



【現在の内浦湾(小湊湾)】

## 第2章 「みなと文化」の要素別概要

小湊は、千葉県管理第三種漁港である小湊漁港を中心とした集落であり、日蓮宗大本山誕生寺の門前町でもある。漁業集落と門前町が一体となった景観が形成されている町である。かつては漁船や廻船の避難港として利用されてきた港であるが、漁業も盛んで今も釣漁・網漁や磯根漁が行われている。突きん棒漁（カジキ）を行う漁船は三陸沖まで出漁している。

漁港に隣接する誕生寺をはじめ、小湊浦には鯛の群がることで知られる特別天然記念物「鯛の浦」があり、遊覧船など観光資源として海面を利用する傾向が強い。なお、「鯛の浦と誕生寺門前町風景」は、千葉県が行った「ちば遺産100選、ちば文化的景観」の一つにも選ばれている。

### 1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

#### (1) 天津・小湊の漁業発展に貢献した人物

##### ①四位六右衛門

関西から進出した漁業者として、天津・小湊の漁業に多大な影響を与えた六右衛門については、その事績を記した「先祖六右衛門より申し伝える事」と表題のある史料が、天津の浄土真宗善覚寺に残されている。この史料は四位六右衛門家5代目の当主が文政8年(1825)の春に、子孫に伝えるべく諸記録をもとに書き残したものである。

この史料によれば、六右衛門は摂津国武庫郡西宮(現兵庫県西宮市)の人、江戸時代のはじめに房州船形村(現千葉県館山市)に移り、元和(1615-23)のころから漁商売を行い成功した。その後、天津村(現鴨川市)に引き移り漁商売を続けた。そのころ天津には西宮からの出張店14、5軒店を構えていたが、その内の城戸(木戸とも)に店を構える7軒と相談して干鯛の生産に乗り出し、紀州・泉州(現大阪府)・芸州(現広島県)から八手網・まかせ網を招き、寛永15年(1638)ころから操業をはじめたところ鯛の大漁が続いた。しかし、当時の天津・小湊には干鯛を生産する干し場が不足していた。六右衛門らは天津村の領主西郷氏に願い出て、菱の生い茂る二夕間浦を開発し、鯛の干し場を造成したという。その後も年々豊漁が続き、1年間に干鯛の生産も2万5,000俵以上に達し、江戸や浦賀の間屋に販売して利益をあげた。これにより漁民も潤ったという。

##### ②土佐の与市

鰯節の製造技術は、紀州から房州に伝えられ、さらに太平洋沿岸に広がったという。安房に新しい技術を伝えた人として知られるのが「土佐の与市」である。当時、房州で生産される鰯節は、鰯の切り身を蒸して生干しにした「なまり節」のようなもので、長期の保存には不向きであった。これに対し土佐節は、長期保存に主眼を置き鰯の切り身を薫製室内に並べて樗などの薪で燻し、その煙をもって鰯の水気を完全に取り去った。製品は見事な味と香りのする、堅くて保存の利く鰯節であった。この技術を当地に伝えたのが与市である。

与市は、紀州の日高郡印南村に生まれ、土佐(現高知県)に出漁して土佐節の製法を学び、やがて土佐節作りの名人といわれた。天明年間(1781-88)になにかの理由で郷里を離れて房州千倉(現南房総市千倉)に移り、その技術を伝えた。技術は房州の各地に広が

り、房州節の名で江戸をはじめ各地に出荷された。鯉節作りの伝統は現在も受け継がれている。

## （２）海を介しての交流によって生まれた言葉

### ①オダワラボッコ

写真は、昭和 6 年（1931）ころの小湊漁港である。海岸近くに横並びに見える船は「オダワラボッコ」と地元の漁師に呼ばれていた、神奈川県小田原からフグや金目鯛の漁に來航していた漁船である。乗組員は船で寝泊まりしていたので、甲板上にシートが張られているのが見える。これらの船で獲った魚は、「カイマルセン」（買回船か）と呼ばれた魚類専用の運搬船で、小田原や東京に運ばれた。

鯛は姿が美しく美味であるところから、古くから祝いの席に欠くことの出来ない魚として用いられていた。当然、小田原でも祝いの席で広く用いられていたが、鯛の代用として料理の膳にのる金目鯛は、小田原近海ではあまり水揚げされなかった。そこで、小田原の漁師は船団を組んで小湊浦に出漁し、その近海で金目鯛を捕獲していたのである。

小湊港に停泊する小田原の船団及び漁に従事する人たちを「オダワラボッコ」と、地元の漁師は呼んだのであるが、『国語大辞典』（小学館）によれば、「ボッコ」とは、千葉県安房地方の方言で「無愛想な者、短気者」を意味するとある。しかし、小湊では小田原から出漁してきた漁船や漁師を含めて広い意味で用いたという。但し、あまり芳しい意味をもつ言葉ではなかったようである。たびたび訪れるうち、小湊に定住した者もあったようで、屋号を「ボッコ」と呼ばれる家が現存する。小田原漁民の小湊への出漁は昭和 10 年代のはじめまで続いたというが、小田原と海を介しての交流によって生まれた「オダワラボッコ」という言葉も、現在ではほとんど耳にすることはない。

### ②方言

房総には、江戸時代の初期より紀州（紀伊国＝現和歌山県）方面から多くの漁民が來航し新しい漁法を伝え、それらの内の少なくない人々が当地に定住した。紀州漁民の來住を示す史料が市内天津の浄土真宗善覚寺に所蔵されているので、その史料によって見てみよう。

享保 19 年（1734）6 月の「網方宗門人別証文」によれば、紀州の有田郡須原村・海士郡



【昭和 6 年ころの小湊漁港】

塩津浦・有田郡湯浅村の10名の船主が、384名の乗組員とともに天津村に逗留し、寺請制度の下で善覚寺の檀家となり同寺の庇護を受け、10張の鰯網漁を操業したという。また、年代を欠くが同時代ころと推定される「紀州須原宗門改帳」は、紀州の有田郡15か村・海士郡3か村・日高郡2か村・室郡1か村の4郡21か村の漁民の来住者を記録している。これらの中には家族や商人なども含まれていたであろう。

このような船を用いた交流活動によって、紀州の方言が房州に伝えられ、房州の方言が紀州に伝えられ、紀州と房州に共通する方言が数多く生まれた。例えば、片口鰯を「せぐる」、罎炉裏を「ゆるり」、縫い物を「ぬいもん」という言葉などは明らかに紀州から伝えられたものと思われる。現在でも用いられている共通の方言は200語に近いといわれている。

### (3) 信仰

#### ①船霊（船玉）信仰

漁船には、フナダマやフナガミサマと呼ぶ神様を祀る。船の推進力に最も関連が深い場所に祀られている。推進力が風力であったころは帆柱を立てる場所の根元に埋め込まれていた。現在は推進力が動力機関となっているので、機関室や操舵室に祀られることが多い。小さな社や木箱に男女一対の人形と紅と白粉、一対のさいころと1年12か月を表す銭12枚、五穀と船主の妻の髪と椰の葉などを納め、船大工か船主が進水式の前に密かに納めたという。なお、椰の葉は悪鬼を除き、災難を免れると信じられている。

#### ②竜神信仰

黒潮流域では、海亀に関する習俗が各地で見られるというが、天津小湊地域でもカメノマクラ（亀の枕）信仰が見られる。当地の漁師は海亀を竜神さまと呼び竜神様のお使いとして大切に扱っている。海亀が定置網に入ると注意しながら網から出し、亀に酒を飲ませて海に放している。

また、亀の枕は豊漁をもたらすものとして珍重する習俗が定着している。亀の枕とは、洋上で海亀が体をあづけたり寄り添うようにした木などの漂流物のことで、漁師たちはこれに出会うと、代わりの板などを亀の側に投げ入れて、亀が枕にしていた浮遊物を、大漁を叶えてくれる竜神の贈り物として持ち帰り、自宅の神棚や氏神様に供えるという。

#### ③誕生寺の八大竜王信仰

誕生寺の竜王堂に甲冑姿で、右手に宝剣、左手に宝珠を持つ八大竜王を表した像が祀られている。竜王堂では正月・5月・9月の年3回、各18日に八大竜王の縁日として大祭が行われている。この縁日には漁師も多数が参拝し、海上安全・大漁満足・家内安全を祈っている。

#### ④清澄寺に奉納された絵馬

清澄寺が所在する清澄山（標高383m）は、海上で自分の船の位置を知るヤマアテを行う特別な意味をもつ山として、清澄寺とともに地元の漁師から熱心に信仰され、海上安全・大漁満足を願う絵馬が奉納されている。

【清澄寺に奉納されている絵馬】

奉納絵馬	寸法（ミリメートル）	年 代
難船図	740×915	嘉永 5 年（1852）
地曳網図	753×887	明治 28 年（1895）
地曳網図	1,215×1,364	不詳
鯉一本釣漁図	1,228×1,444	不詳

清澄寺は鴨川市清澄<sup>あざ</sup>字妙見山に所在。千光山と号し、日蓮宗の七大本山の一か寺。宝亀 2 年（771）の創建。承和 3 年（836）に慈覚大師の中興と伝える。はじめは天台宗であったが江戸時代初期に真言宗に変わり、戦後の昭和 24 年（1949）に日蓮聖人とのゆかりによって日蓮宗に改宗した。

#### （４）禁忌について

漁師は、船上で食事を取ることが多いので弁当を持参するが、弁当のおかずには酢<sup>す</sup>のものは避けるという。特に海士<sup>あま</sup>たちは漁に出る日の朝食でも酢のものは避けるとのことである。「スモドリスル」という語呂合わせから不漁を連想させるので嫌われた。そのほか次のようなものがある。

- 家族の出産には、一定期間出漁を見合わせる。
- 葬式の場合は、三日ほど漁を休み船に触れないようにする。
- 海で死人が出ると出漁を見合わせる。
- 海上でサルやヘビなどの言葉は避ける。それぞれエテコとナガモンなどと呼び変えた。

#### （５）小湊を訪れた文人

##### ①概観

小湊には名利誕生寺が所在し、日蓮の遺跡も多く、風光も明びなところから、江戸はもとより関東一円から多くの人々が訪れている。特に江戸において日蓮宗が普及発展したのは文化・文政期（1804－29）で、日蓮宗寺院は江戸市中で際立った存在を示していたという。その理由は、身延山久遠寺や京都の本圀寺、小湊の誕生寺など日蓮宗大本山の寺院がたびたび江戸出開帳を行い、人々をひきつけたからであるといわれる。

江戸時代、江戸から房州小湊までの道のりは陸路 28 里（約 110km）といわれ、海路については小湊へ直航する便はなく、木更津船（江戸と総州木更津を結ぶ）の帰りを利用して海路をとった場合は、日本橋から木更津まで航路 10 里（約 39km）、風次第では半日程で到着したという。木更津から小湊までの船便はなく、陸路をとることになる。小湊を訪れた主な文人を紹介しよう。

##### ②高山彦九郎

江戸後期の尊王家として知られる彦九郎は、諸国を遊歴して尊王論を提唱し、日記や紀行文を残している。房州に訪れたときの「北行日記」によれば、彦九郎は寛政 2 年（1790）6 月 7 日に江戸を立ち、木更津船で木更津に渡り、それより館山を通り白浜・和田を経て 6 月 18 日に天津に着き、翌日誕生寺を参拝して後、岩高山<sup>がんこうざん</sup>の市が坂を越え安房国から上総

国に入り勝浦に向かっている。

### ③伊能忠敬

江戸後期の測量家・地理学者の忠敬は、享和元年（1801）6月19日に沿岸測量のために小湊に来た。測量日記に「小湊は誕生寺領70石の村、家数は143軒、誕生寺役僧に立ち寄って茶などいかがですかとすすめられたが、潮間（潮のひいている間）の測量が急がれたので立ち寄らず」と記している。

### ④十方庵敬順

江戸後期の人、江戸の日蓮宗本法寺住職を務める傍ら、江戸近郊を中心に旅行して「遊歴雑記」を刊行している。当地を訪れた時期は明確でないが、文政年代（1818-29）の後半と考えられている。敬順は誕生寺をはじめ日蓮ゆかりの寺院を参拝して小湊に一泊している。旅行記に「小湊の旅籠はいずれもきれいであるが、なかでもまつ屋と湊屋などは室内も広い」と旅宿を紹介し、自分は湊屋に泊まっている。

### ⑤安藤広重（初代歌川広重）

浮世絵師として名高い広重が、当地を訪れたのは嘉永5年（1852）のことである。閏2月25日に江戸橋から木更津船に乗り木更津に入り、同2月27日に兼ねてより交流のあった浜荻村（現鴨川市浜荻）の日高宗兵衛宅に着いている。29日に宗兵衛とともに誕生寺を参詣し、3月1日に清澄山に登り清澄寺に参詣している。

### ⑥小川泰堂

相模国（現神奈川県）藤沢の人小川泰堂は、医師であり日蓮の研究家でもある。明治4年（1871）4月に4人の仲間と共に房総旅行を行い、旅行記「観海漫録」を残している。「漫録」は誕生寺や鯛の浦を次のように描いている。

「(4月23日)巳の時(午前10時)ころになり、思いがけず晴天となった。旅館「角熊」の楼上から海の方を見渡せば、風を喜んで漕ぎ出す漁舟の賑わい。また、南西の方向には内浦の松ヶ鼻が見え、天津の布入の出崎も見える。遙かかなたには突き出た白浜・忽戸の鼻も見える。その風景は筆も及ばない美しさである。

晴れたので誕生寺の参詣に出掛ける。町の中ほどに橋があり、下を流れる川を市川という。3町(約327m)ばかり行くと左に妙日山妙蓮寺という寺がある。妙日と妙蓮は日蓮上人の父母の法名である。この寺に墓所がある。堂に上ると住職が厨子を開いてくれた。

(中略)

これより5町ほどで誕生寺に着く。山門に入ると左に誕生水がある。誕生寺は15間(約27m)四方の本堂(祖師堂)を有する大寺である。本院唐門の前に谷川の水がみなぎり、書院の庭前には滝が流れ落ち、奥深く、もの静かにして、極楽浄土にいるような気持ちがした。

門前から舟に乗り、日蓮上人誕生のとき蓮華の花が一面に咲いたという蓮華淵の名所を見物する。平島・鶴島など数々あり。また、小島あり弁天島ともいう。ここは鯛の浦といい、船人しきりに舟の舷側(横側)を叩き、餌を投げ入れる。鯛が重なり合いながら浮び出る。」



【鯛の浦遊歩道】

### （6）謡曲にうたわれた蓮華淵

小湊は、日蓮誕生地として様々な縁起を伝えている。代表的なのが日蓮誕生のときに、家の庭先から突然清水が湧き（誕生水）、庭前の海上に蓮華の花が咲きほこり（蓮華淵）、鯛が海面に群れ集まった（鯛の浦）という三奇瑞である。

「さても房州小湊の蓮華潭は、高祖の御霊蹟にて御座候へども、未だ参詣申さず候程に、この度思い立ち安房路へと急ぎ候」ではじまるこの謡曲は「蓮華潭」と呼ばれる。作者も年代も明らかではないが、明治末期ころの作と推定されている（続小湊山史の散策）。

## 2. 現代における「みなと文化」

### （1）資料に見る門前町・港町の町並み

小湊の門前町・港町の原形は、江戸時代すでに形成されていたものと思われる。江戸時代の元禄14年（1701）に作成された誕生寺所蔵の誕生寺領「小湊・市川門前屋敷水帳（検地帳）」と「名寄帳」を用いて、町の様子を見てみよう。

門前町の町名と家数は、波来町海手に6軒、同じく山手に9軒、新町山手に13軒、同海手に12軒、小船谷町山手に19軒、海手に6軒、湊町に14軒、入町南側に4軒、同北側に4軒、橋本町山手に8軒、同海手に7軒、浜町北側に6軒、南側に7軒、市川古屋敷町に6軒、市川大目田屋敷に10軒、三光谷に1軒の屋敷地が記録され、合計132軒を数える。職業については、木挽（きこり）5軒、大工が2軒、鍛冶が1軒、酒屋が2軒、船大工が1軒、豆腐屋が1軒、桶屋が1軒、釣溜が2軒と書き上げている。



【現在の小字表記】

ここに紹介した元禄 14 年の資料に見える小字名の中には、現在の小字に見られないものがある。地図記載の小字名（□内）と比べて見よう。なお、地図記載の板町は、祓町の誤りである。小湊地区の波来町は現在の祓町、小船谷町は変わらず、橋本町は、現在の田町にあたるか、浜町は、北町にあたるか、内浦地区の市川古屋敷町と市川大目田屋敷は現在の市川か、新町は現在と変わらず、湊町・入町・三光谷について、現在はよくわからない。元禄 16 年の大地震・津波によって、片海（日蓮誕生の地）などととも陥没または流出したのであろうか。

元禄 14 年から 137 年後の天保 9 年（1838）に作成された「小湊村書上」（誕生寺所蔵）によれば、家数 150 軒、人数 824 人、領主誕生寺及び塔中 10 軒と誕生寺末頭（末寺の筆頭）妙蓮寺とあり、村民の職業については、鍛冶 3 人、家大工 5 人、舟大工 3 人、桶工 2 人、穀物・酒・木綿・魚類などを扱う商人が 58 軒、漁人が 79 軒であると書き上げている。さらに避難港として東北諸藩の船役所も置かれていた。資料に見るように現在の小湊の原形は、江戸時代に形成されていたと考えて間違いないであろう。

## （２）姿を消した和船

昭和 40 年（1965）代の後半ころから木造漁船は、強化プラスチック製の漁船へと転換が進み、当地でも伝統的な木造船はほとんど見られなくなった。

かつて当地でみられた特徴的な漁船の一つに、イッチョウコギ（一挺漕）またはアマブネ（海人船）と呼ばれた小型の和船があった。この船は主に小湊地区周辺の磯漁に使用されていた。海女たちは昼休みを陸の海女小屋でとったが、海士たちはそれぞれ自分の船を用いるので、出漁すると夕方まで海上で漁を行った。そのため海上で身体を暖める工夫が必要となった。そこでアマブネは胴の間を中心に大きな風除けの戸板を立て、60cm 四方ほどの囲炉裏をつくり、松や竹などを燃やして暖を採った。昭和 50 年以降は薪に変わってプロパンガスが使用されるようになった。

今では、このような漁業風景は見られない。



【イッチョウコギ】

## （３）船大工・造船業の現状

三方海に囲まれた千葉県の沿海漁業は江戸時代から盛んとなり、和船造りの船大工も活気に満ちていた。天保 9 年（1838）5 月の「小湊村書上」にも船大工 3 名が書き上げられている。しかし、木造船が鉄船やプラスチック船に押され、船大工職人は年々減り続け、現在では全くといっていいほど姿を消してしまった。千葉県下で船大工を続けているのはただの一軒といわれる。和船の技術を持つ人も、今は置物用の飾り船や料理を盛りつける料理船造りに技術を生かしている現状である。当地でも川名さんという方が、船大工の経験を活かしてカジキ船などの模型を制作している。

和船造りに欠かせない「舟ノコ」の職人も、年を追うごとに姿を消し、平成に入り外房では市内江見の粕谷さん一軒が、房州舟ノコの伝統技術を継承していた。

## （４）伝統的ハバノリ漁

小湊地区では、正月の縁起物食材として珍重されるハバノリ漁が、冬の磯で行われている。「日蓮聖人遺文」にも「故郷の香りのする海苔」として登場するノリ漁は、漁業組合の音頭で毎年 12 月と 1 月に、それぞれ 1 日だけ解禁して組合員総出で行われる。

摘み取ったノリは、ノリ簀の上に広げ天日で乾燥させ、出来上がったものは入札にかけて店先に並ぶのである。ハバノリは組合主導で収穫されるヒジキとともに、小湊の代表的な海産物加工品である。

そのほかの海産物加工品としては、小湊浦（内浦浦とも）沖で獲れる鯖・金目鯛などの干し物などは、土産品として好評である。

## （５）資料に見る浦役人

小湊浦は、東廻り航路の避難港として利用された関係で、小湊には東北諸藩の廻船役所

(番所) が置かれ船宿が設けられた。また、寄港する諸廻船の世話をを行う浦役人が置かれていた。小湊では廻船方と呼ばれていた。いつごろから置かれていたのかは明確でないが、資料上で確認できるのは江戸時代後期である。なお、諸藩の廻船役所は、はじめ小湊にも設置されていたが、元禄の大地震・津波による被害後は、上総の興津（現勝浦市）に移されている。

誕生寺所蔵の弘化 2 年（1845）3 月の「廻船取扱い出入内済につき議定」によれば、廻船方として森嘉茂次郎・鈴木金三郎・渡辺啓三郎の 3 名を挙げている。森嘉茂次郎は伊豆国（現静岡県）賀茂の人と伝えられ、一般の商船のほか特に仙台藩の米穀を江戸に運ぶ廻船について、船員の上陸・休養、船の食料や備品などの補給や斡旋、海難発生の際の対応を行った。渡辺啓三郎は小湊村の名主であり廻船方を兼務していた。先祖は日蓮上人の父とされる貫名重忠の従者と伝えられている。渡辺家は江戸時代何代にも渡って小湊村の名主を務めた小湊の旧家である。鈴木金三郎についての人物像は不詳である。

#### （6）戦争の傷跡（特攻兵器震洋の基地跡）

小湊漁港に隣接し海に面する妙蓮寺山のふもとに、戦争末期の昭和 20 年（1945）5 月に震洋という特別攻撃艇の部隊が配備された。震洋は特攻兵器として考案されたもので、ベニヤ板を張り合わせて製造したモーターボート（全長 5～6m）型の特攻艇で、自動車のエンジンを 2 基搭載し、250kg 爆弾を前面に装着した。1 人または 2 人乗りで、約 50 隻で一部隊を編成して敵艦に体当たりするというものであった。

震洋の格納のために山麓に突貫工事で、長さ 30m から 60m ほどのトンネルが 7 本掘られた。基地は小湊のほか勝浦・興津にも設けられた。しかし、幸いにも出撃することなく終戦を迎えた。今は危険防止のため遮へい壁が設けられている。

#### （7）小湊漁港の航路標識

平成 7 年（1995）に旧灯台にかわって、小湊漁港沖 500m の岩礁上に設置された航路標識。日本で初めて波エネルギーを電源とした波力発電標識である。



【航路標識】

### 第3章 「みなと文化」の保存と振興及び今後の課題

#### 1. 「みなとの文化」振興への今後の課題と伝統的な漁具・道具の収蔵・展示施設

小湊地区の主要な漁法は、サンマやサバ・イワシなどを漁獲対象とする敷網漁の一種である棒受網漁、次いで岩礁に富む海岸線の磯根資源に恵まれるところから、採貝・採藻も盛んであり、また、釣漁も行われている。近年は栽培漁業への取り組みも積極的である。使用される漁船は5トン未満の小型船がほとんどで小規模経営が圧倒的に多く、後継者問題などの悩みも抱えている。

小湊の漁業の今後を考える場合、やはり海と観光に結び付けて発展を図ることが肝要である。国の特別天然記念物「鯛の浦」で、1m余りの鯛の大群が悠然と泳ぐ様子を船上から眺めることは、海とかかわる小湊観光の大きな魅力であり一見に値する。そして小湊湾の美しい景色。さらに日蓮誕生の地に建立された大寺誕生寺、日蓮勉強の大寺であり後に立教開宗を行った清澄寺、夏は水清き小湊湾での海水浴。目の前の海で獲れた新鮮な魚介類を観光客に提供しての歓迎。これは地域の特性を生かした最上の方法ではないだろうか。

#### (1) 伝統的な漁具・道具の収蔵・展示施設

##### ①千葉県立安房博物館

昭和48年(1973)に県立博物館として館山市館山に開設された千葉県立安房博物館は、房総の漁業に関する資料を収蔵・調査・研究・展示を目的に設置された。小湊地区からも多くの資料が納められている。なお、同館は平成21年4月をもって館山市に移管され、市立博物館の分館として利用されることになった。

##### ②鴨川市郷土資料館

昭和57年(1982)11月に開館。市域の歴史・民俗・考古などの資料とともに、漁業用具を収蔵し常設展示している。

#### (2) 港を通じた地域の振興活動

##### ①鯛の浦遊歩道の整備

小湊は、豊かな自然と歴史遺跡、それに良好な漁場という地域の特性を活かし、観光と漁業による活気あるまちづくりを目指している。特に小湊浦前面の内浦湾に生息するマダイは、水深10~20mの浅い海域に群生し、その生態が極めて珍しいとされることから、昭和42年(1967)に国の「特別天然記念物」に指定された。

この指定を記念して鯛の浦遊歩道が設けられたが、長い年月を経て遊歩道も塩害や波浪により至るところに痛みが見られるようになり、平成20年度・21年度の2か年計画で本格的整備が行われることとなった。

遊歩道は、誕生寺前の漁港から大弁天島・小弁天島が一望できる休憩所までの約600mほどの道である。整備完成のあかつきには、より多くの観光客が訪れるであろうし、また、漁場への往復道として地元の産業活性化にも役立つであろうことが期待されている。

##### ②「鯛のまち」観光ボランティアガイド

天津小湊には、年間を通して70万人近い観光客が訪れる。この人たちを対象に郷土の

歴史に興味をもつ有志が研さんを積み、小湊・清澄地区の仏閣や名勝・史跡を紹介する散策ガイドを立ち上げ、喜ばれている。



【現在の小湊漁港】

## 〔参考資料〕

- 「小湊山史の散策」 (寺尾英智著 平成 12 年)  
「続小湊山史の散策」 (寺尾英智著 平成 18 年)  
「天津小湊町史 上・下」 (旧天津小湊町 平成 10 年)  
「天津小湊町史 史料集」 (旧天津小湊町 平成 2 年)  
「おもしろ百物語」 (天津小湊観光協会)  
「天津小湊写真集」 (旧天津小湊町 平成 6 年)  
「小湊のあゆみ」 (鴨川市教育委員会 平成 19 年)  
「史談・天津小湊二号」 (旧天津小湊町 平成 12 年)  
「観海漫録」 (小川泰堂著)  
「遊歴雑記」 (十方庵敬順)  
「伊能忠敬・測量日記」  
「高山彦九郎・北行日記」  
「千葉県安房郡誌」 (安房郡教育会 大正 15 年)  
「安房郡水産沿革史」 (安房水産組合 大正 3 年)  
「水産調」 (平野仁右衛門家文書)  
「千葉県の漁港」 (千葉県 昭和 3 年)